

淨土宗捨世派の自律性と社會性

伊 藤 眞 徹

(一)

捨世とは通俗的には隱遁生活を意味するのであるが、所謂捨世派の祖と稱せられる稱念の一流は、「出家中の遁世にして眞の出家なるを捨世とは名付たるなり」(淨全一七・六七八)と定義付けている。元來出家は捨家棄欲した身ではあるが、澆季のならいとして剃髮染衣し乍ら、心を五欲の境に馳せ名利を悦び、奢侈華麗の生活を耻とせぬ者の世に多いことを慨き、「世勢を遠ざけ勤行精進」した稱念に、歸依渴仰する清衆多く集り、自然發生的に一家の風儀を形成し、世に捨世流義と稱せられるようになった。しかるにこれは寶曆一二年(一七六二)、『稱念上人行狀記』の作者一心院四十世妙阿の「述懷」中の言であつて、恐らく作者の見聞と傳承を總合した説であらう。

一心院が捨世地として、廣く世人に知られるようになったのは、寛文五年(一六六五)一〇月、松野元敬の自序を載せる『扶桑京華志』卷二には、「在_ニ大谷寺山上、緣譽稱念開基之地、天文二十三年七月十九日寂」とあつて、呼稱又は寺院の特殊性格については何等觸れていない。それより二〇年貞享元年(一六八四)の序のある『雍州府志』卷四には、「在_ニ知恩院之山上、淨土宗稱念上人之開基也、此僧隱遁而不_ニ出世、此一派寺院處々有_レ之、稱_ニ一心院派、或號_ニ捨世地」とある。隱遁とは出家中の遁世の意味であり、「關東檀林の座位に隨ひ出世の年月をとほさること我が山の

清風なり」(稱念上人行狀記下淨全一七、六七八)とある如く、出世を希求せず、俗情を捨離する別風を最もよく顯わしている。この後寶

曆四年(一七五四)釋淨慧の『山城名跡巡行志』卷二には、「當院並末學不着色衣、遁世隱士之宗風也」とあつて、

「浮世の名聞をいとひ墨染の法衣のみにして餘長なく、勅許は蒙り玉ひながら香衣は淨安寺にとどめ置檀林師家の錦欄織の類ひはさら也官寺のことく香衣の類は用ひ給はす所修の行法は稱名一行の外四種の助業もさしお」かれた稱念の行狀が、妙阿の興隆により官寺官僧と異る、一心院の特質が發輝せられていたことが知られる。

この捨世の事實は敢えて稱念に始まるところでなく、妙阿は「むかし元祖大師台嶠の交衆を辭して黒谷に幽居し玉へる」(同上)と述べ、その先蹤を法然の黒谷隱遁に求めているが、忍濃は寛文二年(一六六二)一八歳の時、「曩者宗祖、年至三十八、辭台嶠皇圓閣梨席、隱閉黒谷、絕時俗交、大企弘法之志、我亦同齡、虛積歲月、内媿深矣」と自省自歎している。この時捨世の念を確立したとは傳えられていないが、他日法然の足跡を踏み、捨世せんとする道芽は萌したことであろう。この祖傳によつて隱遁の心を抱いたのは法岸であつて、東遊して増上寺に隸籍中、「或聞圓光大師繪詞傳、道心若涌發遁世之志」(略傳集淨全一八、五二九)とある。かくの如く祖聖の道跡を慕つて遁世したことは、捨世の系譜の濫觴を法然に求めることが出来る。

(二)

良忠は法幢を政治の中心地である鎌倉に掲げたが、外政權の瓦解とその後の戦亂に伴う社會不安の人心に投合し、内淨土宗内には幾多の英才が輩出して、大いに關東に教線を擴大した。此間京都に鎮西白旗の教勢を廣めたのは、皇室及び貴族等の社會の上層階級の歸仰篤きにもよるが、此の間如空、智演、定玄、空圓、等熙、慶竺、珠琳、良敏、聖然、慶秀、存牛、幡隨意等の宗教活動の勞を没却することは出来ない。更に、舜昌の『法然上人行狀繪圖』四八卷

の撰上は、法然鑽仰意識を振興せしめ、特に永享三年（一四三一）、應仁元年（一四六七）、永正一四年（一五一七）の僅か七十餘年間に、三度祖山知恩院が炎上し、屢々復興事業が行われ、廣く大衆の淨財を勸進したことは、僧侶の活動の振幅を大にし、祖廟特に法然に對する關心を昂めたことと思われる。

上下の歸仰によつて、法然を追憶回想する關節は遠忌にあるが、政治・社會的に盛微の存することは免れない。足利時代の應永一八年（一四一一）の二〇〇年忌には通明國師の號を賜つたが、二五〇年忌は將軍義政の批政百出してその勢威乏しく、權力の下向と諸家の相續問題、それに關連した家臣の跋扈によつて、應仁の大亂の原因を醸成しつつあつた寛正二年（一四六一）、珠琳によつて嚴修せられた。三〇〇年御忌は戰國亂世の初め、細川氏の内訌に乗じて、義植は大内義興の力によつて將軍に復することを得たが、實權は義興、細川高國の掌握するところとなつた政治情勢下の、永正八年（一五一二）愚底の住山中に相當している。かくの如き政情下にあつて、文教の榮える理はなく、諸宗の教學も大いに衰微し、僧風も從つて亦頽廢した^①。淨土宗も名僧の教化活動の見るべきものあるに拘らず、大勢は下向線上を彷徨せざるを得なかつた。しかし外觀上は地方勢力の擡頭により、諸侯豪士と稱せられる實權者の支援により、寺院は大いに建立せられて、今日見るが如き現勢圖を描出したのである。寺院の盛觀に伴わぬ僧風の後退、從て祖師精神沒却の現實を直視した時、内に燃える宗教心を抱く者は、徒らに慷慨するのみでなく、ここに如實に祖意に復歸せんとする信仰運動を起すに至るのは當然である。

法然の死を堵しての宣布は專修念佛である。法然の堅持したところは還愚痴であり、十惡の法然房の自覺であつた（昭和新修全）。この精神を繼承し、如實に實修せんとして閑地に道場を構え念佛者の環境を整え、祖風を固守する、專念主義の主張者は稱念である。稱念の道風を繼承する專念主義實踐者を捨世派と云い、その道場を後世捨世地と總稱せられているが、「出家中の隱遁者」である捨世僧は、單に獨住專念の自行のみならず、徳化を渴仰する道俗清衆

を薰陶化益した、所謂利他の社會活動の大なることを注目せなければならない。これは相次いで擡頭した持律念佛主義の運動と甚だ對照的である。捨世派の中においても、回心轉入の隱遁の動機について、宗學研鑽即ち入寺、傳法、拜綸（出世）の宗侶養成の過程中、志を發す者があり、又全然檀林に掛錫せずして專念修道の自行に精進したものと大別せられる。前者は檀林において切磋の業を受け、宗學の歪曲轉訛し、祖意に遠去かることを痛憤し、宗戒兩脈相承後、枝末の些事に心意を勞し、名利に牽れる學業を放擲して、專修の自行精進と、祖風宣揚の化他に生涯を盡した。この中においても隱遁の志の檀林入寺に先進するものと、然らざるものとがある。所謂隱遁の志古きものは、世の風儀に順應して檀林入寺したまでである。

(三)

專念主義運動の先驅者稱念（一五五三—一五五四）の動機については、『稱念上人行業記』に二八歳の時、學臘一六年の修學の道を放棄したことについて、「上人隱遁の御心ふかく、世の名利に縛せらるる事を厭ひ」（淨全一七、）と述べ、美服滋味を好み、華麗の住處を望み、心を五欲の境に馳せて恥ぢぬ世の僧風に逆行して、捨世して眞の出家——遁世して天智庵に籠居した。その行相は「外には通軌を護持し、裏には唯稱念佛の一行を要期とな」したことは、法然の「罪は五逆もさはり無と知とも、構て小罪をもつくらじと思ふべし。往生は一念に足ぬと存ずとも、多念を重ねんと思ふべし。信をば一念に往生すと取て、行をば多念にはげむべし」（昭和新增集四九一—）の常の詞の勵守である。この事は師が入洛して、先ず法然終焉の地に詣で、更に翌天文一七年（一五四八）祖廟の南に庵を結び、尋常不臥の日課六萬の行業を修し、遺跡の修築をなしたことは、祖風の恢興を以て畢生の念願とせられたことが知られる。かくの如く稱念の精神的革命を誘致した契機には、上述の如き内面的なるものの外に、外面的なるものとして戰國亂世の不安な世相が、法然

を時代救済者として追慕回想せられたことと、知恩院數度の回祿による復興が、末流に復古精神を振起せしめる原因となつたことを見逃すことは出来ない。

稱念の精神と實踐を、より具體的に顯示したものは以八(一五三二)である。『以八上人行狀記』には「一家の奥旨を傳う、而も修學を勵ましたまはゞ大業をもとげらるべき器なりけれども、素より名利をいとひ、隱遁の志ふるかりければ、つねに一舉萬里絕域他方ならんことをのみおもひたまひぬ。遂に行年廿八歳のなつ、永く師席を辭し、舊里をはなれて抖擻行脚の身となれり」(淨全一七・七六六)とある。この時兄弟に示された置文の中に、「今どきの佛法のあつかひは一向外道の法にて候、よく／＼經論を見はけ能身に於て心に置き受て思案候はゞ、佛祖の内證にかなふべく候」(同上)とは、現實を遊離した觀念的戲論の學、訓詁膠着の状態にある宗學研究によつては、眞實を探求把握することを得ずと達觀し、「學生骨になりて、念佛やうしなはんずらむ」(昭和新修全集四九三)の法然の戒告に従い、生涯の進路を轉向したものであり、稱念にも通ずる修學の歸結と思われる。しかし稱念の行實と異なるところは、「隱遁の志ふるかりければ」の點が注意せられる。

稱念の如く學解の深化によつて、出家の本意を自覺し、二利の祖業を恢興せんとしたものに、忍激、無能、穩固、學信及び法岸を始めとする所謂大日比三師がある。これに對し隱遁の志ふるき以八と軌を等しうするものに澄禪、關通、雲說等の諸師を擧げることが出来る。

忍激(一六四五)は寛文二年(一六六二)一八歳の時、法然の黒谷に隱遁して、時俗の交りを絶つた先蹤を慕い、稱名法の轉俗訛略の弊風を匡正せんとの一誓^③を起しているのは、祖傳研究の成果であり、隱遁精神の胚胎である。二〇歳自ら「所貴沙門之行者、隨緣居住、何留心於一處哉」の信念を確立した。その隨緣居住とは後日僧官の事によつて上洛した師は、一日楨尾の山林閑寂、律範正整たるをみて、「我他日將息緣茲嶺、持戒念佛、廣度衆生、以

遂_ニ平生之志_ト也」(淨全一八・五)と述べている如く、幽棲度生の念に萌すものである。しかるに寛文七年(一六六七)冬、江戸の火災に寺院民居の焼燼するのを見て、一切有爲の無常なることを諦觀し、「於是決然起_テ一舉萬里、飄飄然如_シ野鶴孤雲、無_レ所_ニ得礙_ニ之志_ト」して、世人に知られないように、その名傳貞を忍激と改め、名實共にその迹を晦まし、道を東海道にとつて遂に京に入り、知恩院の眞影に詣して「私啓_ニ素志_ト」き、又清水觀音にも祈念を凝らしているが、之れ偏えに幽棲度生の一事にあつた。

無能(一六八三)は元祿一三年(一七〇〇)一八歳檀林に掛錫し、學行に寸陰を惜しみ、二三歳兩脈を稟承し、二六歳遂に遁世の宿志を達成した。『無能和尙行業記』には、その趣旨について「われ性として財欲ふかし、若世上にまじらひ、此身を立んと思はゞ、事にふれて心中の悵望たゆることあるべからず、ひたすら俗念のみ深くて、心行は日夜に疎かになりもてゆかんは一定なり、しかじ非人法師の身となりて、稱名の數遍を策まんにはと、かく年ごろ思ひめぐらして、永く此世を捨侍りつるなり、全く塵外に逍遙して、安逸を求んとはあらず、只身を輕くして世望を少くし、不急の事をさしをきて數遍の功を積んこひねがふ計なり、更に別の意許なし」(淨全一八・一)と述べている。一般社會に伍して宗教生活を營まんとすれば、一切惡の根元である欲心の熾烈に起らんことを慮り、ここに世を捨て専修一行に精進せんとした心願を物語っている。

穩岡(一七二〇)は一八歳東遊して緣山に留まり、後諸山の講肆に列したが、偶々託龍の懇切なる教示により、「於是絕念義學、篤志淨業、與龍法契日密、龍赴相州眞鶴、結廬念佛、師復行、練信行」(淨全一八・二)とある。その教誡の要旨は「區々智解不足以敵生死、不若修淨業而越三界、謁壽尊於清泰、一聞超悟深法、之爲得計也」にある。しかし後には忍激の風格を慕つたことは、「董貞照院二十有五年、院乃忍激和尚所中興、移獅谷之規矩、風儀峻整之道場也」とある機縁によつて推知せられる。元來身を野鶴孤雲に托して行脚する目的は、靈區に念佛練行し、遺蹟に高僧を偲

んで結縁修道することにあるから、止住二利することも亦名徳の足跡を踏まんとするものであるから、遊履の靈地、止住の寺院を媒介として自然捨世派の系譜も成立することとなる。

學信（一七二四）は二〇歳東武三緣山に受學したが、『學信和尚行狀記』によれば、「師法蘊漸たけにしかは、宗戒兩脈の稟受も障碍なく成し後、ひたすら名利の榮進をいとひ、もはら潜修密證の志操深かりしゆゑ、やがて衆僧の交をさけ、學席を辭し」（淨全一八・三〇三）た。當時の弊風である「名利の榮進」を排除するのが動機であるが、單にそれのみに止まらず、後京師に登り湛慧に受戒したことは、破戒滿洲の僧風に飽き足らず、護法の念湧き立つたがためである。更に吉水の正風を扶起せんとして鎮西に赴き、長門の雲説に謁し、嚴島光明院の寺規嚴誠なるを見て蓮社の古風を慕うた。後に法然院、光明院に止住したことは、忍激、以八の風格に私淑するものであり、特に數年光明院を董したことは、以八の跡懷しく、山海の清朗が師の意に契うたがためである。

法岸（一七四四）は寶曆一〇年（一七六〇）東遊して増上寺に隸し、宗學を修め、「或閱圓光大師繪詞傳、道心若涌發通世之志」（淨全一八・五二九）した。これ忍激と等しく祖傳の研鑽が回心の動機をなすもので、眞摯な末徒には祖聖の行狀が、宗教生活の規範として賦與せられた寶典となる。かくして法岸が「遂辭講肆、一舉萬里、孤錫似雲、輟晦蹤迹」し、回心したのは同一三年春である。

かくの如く、宗學、祖傳の研鑽によつて開眼せられた青年僧は、當時の行學共に衰頹した佛教社會に、官僧として名利の出世に望みを囑し、一日の偷安を貪ることを得なかつたのである。

(四)

以八の如く檀林入寺、兩脈相承に先立ち、夙に隱遁の志を抱いたものに澄禪（一六五二）は自ら頭を剃つ

て出家し、同侶の勸奨によつて東都に遊學したが、兩脈相承後、「尋常學窓に螢雪を要せず、たゞ禪那稱名を緯とし、跡を林藪にのがれんことを心中にふかく欲し」(證禪上人繪詞傳)た。されど學窓の修學は同侶の勤めによる受動的なもので、それに先行する出家の目的は稱名の一行を修せんがためである。故に學業を廢し、禪那稱名一行に結歸し、身を雲水の境に甘んじ相州曾我の巖窟、塔峰阿彌陀寺の靈獄に入つて自行精進した。塔峰については『行狀記』に「そも此山は嘗て彈誓上人草創して、巖窟に行すまし給へる賢き跡をしたひつゝ、こもりゐて靜に念誦したまふ」とあつて、ここに彈誓との繋りが結ばれ、晩年古知谷阿彌陀寺に幽棲し、彼の地において命終する因縁は、夙に此時結ばれている。

關通(一六九六・一七七〇)が一六歳の時、東遊せんとする門出に、師靈徹の與えた教誡は、「夫學也者非汲汲以務爲名爲利之謂、只是上求菩提下化衆生、造次于斯顛沛于斯、此爲菩薩大丈夫之所志也」(關通和尚行業記淨全一八・二二六)であつた。夙に名利の學は排除せられているが、二二歳兩脈稟承後、一日『元亨釋書』を繙ぎ、吉水の法流を汲む恩澤に感激し、ここに自省するところ深く、「かへりて清ながれを濁さば、何ぞ獅子身中の虫に異ならん。不肖なりといへともねかはくは大師の跡を踐て、專修稱名しついに修證を得て宗法を舉揚し、自他を饒益せん」(同上二七)の志願をあらたにしている。これ教界の弊風に墮することを自戒し、宗風の宣揚を以て、己が負荷の任としたのである。かくて世累を通れ遊方の途に上つたのは、享保八年(一七二三)二八歳の時である(行業記上)。しかるに『關通上人略年譜』には二六歳としてゐる。この遠遊を止め本國に歸つた年時と因縁について、『行業記』に「無能和尙行業記を閲し、遊履して日を過は閑居して念佛するにはしかず」と決意したとある。この時は凡そ享保一〇年頃と思われる。『向譽關通行業記』には伊勢惣通寺の辭山について、「同十一年、師三十一歳春捨世決心して惣通を辭し、同寺町欣淨寺の北に惣持寺と號する小庵に獨住籠居し」とある。かくの如くにして關通は、師の靈徹の教えによつて名利を排し、元亨釋書の披覽

によつて法然の高恩に感じ、香衣被着允許を得て後、世果を連れて遊方し、無能の閑居念佛に刺戟せられて遠遊をやめ、機縁に隨う所住念佛教化生活に入つた。故に師表によつて幼少の心田に植付られた道樹は、よく培養せられて遂に捨世するに至り、その過程において何等外的又は内的な契機を見出すことが出来ない。

雲説（一七〇六）は「一歳の時出家し、一七歳の冬「衆僧の交りを厭ひ閑居の思ひひたすら」（雲説和尚別行）であつたが、師雲岡の勸告により三緣山に隸した。二六歳宗脈を傳受し、長門に歸り自行化他専ら一枚起請文を依據とした。妙慶寺は隱室に等しきゆえ、有縁の地として在留二一年、度生の益廣く及ぼされたので、萩城下の巨利晋董の沙汰を轉機として、「素より官寺の望なく、たゞ隱遁の志のみ深く」（同上）、遂に五〇歳の極月、妙慶寺の東に草庵を結び、専修念佛したが、追慕の道俗に對する利人の教誡は、敢えて廢弛することはなかつた。

以上の如く、元來出家の目的は衆生化度にあり、度生の大用の基いは先ず修學と自行の上に存立するものである。かくて修學と自行を双修し、後に修學を廢して自行に結歸するところに、出家の遁世即ち捨世の事實が現存する。されど此れに對して出家即遁世の修道生活は、學事によつて中斷せられることなく、寧ろ超越者の啓示又は法然の遺誓に導かれて單信稱名し、生涯に捨世の歴史的事實を見ないが、出家の上に解決せられた既定の事實として具象せられている一派がある。即ち彈誓、徳本の如きその人である。

彈誓（一五七三）は『彈誓上人繪詞傳』によれば、九歳の時發心して、自ら髻を切り彈誓と自稱し、美濃塚尾の觀音堂に參籠祈願して、「念佛の一行高く諸行に勝るゝ旨」の啓示を受け（淨全一七・六八六）、爾來一心稱名の業二〇年に及んだ。

その後「利生のおもひを起し」（同上）諸國に遊化して遂に佐渡にわたり、慶長二年（一五九七）檀特山の巖窟に於て彌陀の靈感を得た。世に彈誓經と云われるのは、この時の直説を書記したものと傳えられている。後甲斐・信濃を勸化し、江戸に出て幡隨意院白道に彌陀直受の法を傳え、白道から白簇一流の宗要を相傳した。更に相州・遠州・

尾州を経て京に入り、古知谷に小庵を結び朝暮念佛し、此處に彈誓佛一流の法を傳えた。師の生涯操持するところは「質朴にして花美にわたらず、衣物は布木綿紙子に過ず、食物は抹香に松の甘皮を合せて石臼にて搗、是を丸となして食し給ふに至る」(同^上六九六)とある。威儀亦嚴肅であつたが、その巖穴修道の風儀は「上人所々山居の時は樹下石上に坐し、本尊をも安ぜず聖教をも持せず香花をも供せず、但口稱念佛の外他事なし」(同^上六九八)とあるが、之れ本尊聖教の輕視でなく眞佛を拜して、專稱念佛をせんとす賀古教信の行業を踐むものである。

徳本(一七五八—一八一八)は幼時既に無常を怖れ、出家を志しつつ二親の許しを得ざるまま、家業に従ひ念佛相續した。天明四年(一七八四)二七歳に至り、初めて宿志を達し、その後處々に苦修練行し、彈誓・澄禪の山居修行に倣うところがあつた。後寛政六年(一七九四)入洛して華頂山に詣で、「懇に上酬慈恩の持念をこら」(淨全一八・三八六)し、古知谷に彈誓の舊蹟を訪ねて結縁し、爾來各地の名山靈區を行脚し、諸人に結縁し、江戸に入つて宗戒兩脈を相承したのは享和三年(一八〇三)である。一處不住の師が心を牽れたのは、證如の舊跡、法然止住四年の攝津勝尾の草庵であり、一橋民部卿の懇請により留錫したのが小石川一行院の捨世道場である。徳本が自行の準繩とし、化他開闢の要義はただ法然の遺誓一枚起請文であつた。法然の遺誓を如實に履修せんには、學事に寸陰を割くことを得ない。故に「門下には餘業を禁ずといへども、汝にのみ持名の暇書を讀事をゆるす」(同^上四三四)の恩命を受けたのは、本佛唯一人であつて、修學すら餘業の中に包含して廢捨せられている。

以上を以て一應考察を概括すると、徳本は捨世派諸師の舊蹟に結縁遊行しているが、『徳本行者傳』卷上に「昔禪誓・澄禪の兩大徳は、木食草衣にて久しく山居修行し給ひしよしなり、おもふに師が今の行業と甚相似たり」との縁山學侶の言に、「我もとより其志あり」と行狀を等しくし、山居斷穀、念佛不退であつたことは、特に彈誓・澄禪の行修に倣うところがある。澄禪の遺跡古知谷は勿論、近江平子山に行化したことは『徳本上人御入來記』に詳かであ

つて、徳本↓澄禪↓彈誓と連なるものである。關通は無能和尙行業記を以て、弟子の信行策勵の書の隨一となすことを規定している。又法岸と關通の關係は既に述べたところであるから、法岸↓關通↓無能と迦行することが出来る。法岸は明和元年（一七六四）妙慶寺雲説に參見請益し、法要を具さに受けている。學信は妙慶寺に雲説を訪ひ嚴島光明院に詣し、後獅ヶ谷法然院に懇請せられたが、「意に愜ぬこと」あつて、忽ち離山し、光明院檀越の致請には、「以八・厭求などの古徳の跡なつかしく」、殊に自然環境意に契えば請に應じた。以八は嘗て勢州源福寺、石州杖溪寺に屢往來し、洛東一心院に幽棲しているが、筑後善導寺に詣して善導、法然、聖光三祖の慈恩を報酬し、美作誕生寺の再興に努めているから、稱念の行業と總合して、學信↓雲説↓以八↓稱念と辿ることを得る。穩岡は忍激に私淑するところ深い。扱て稱念、彈誓、忍激、無能の準據するところは、稱念は彌陀本願の正定業なる純一無雜の念佛の專修であり、彈誓は諸行に勝る念佛の一行を、斷穀獨住、山居專念して一流を建て、忍激は「追々宗祖之遺風、以爲齋戒清淨、般舟三昧道場」（淨全一八・一七）したのが法然院創建の理念である。無能は「上人（法然）の一開永不閉の旨を守るべし、暫開の定散をおもふべからず」（淨全一八・一一九）との夢告により、持戒の心を止め隨犯隨懺の念佛を自行化他とした。系列的には四種の相違を認めることが出来るが、されどその個性の奥底に祖意の躍動することは同一である。

(五)

捨世派の自利々他の宗教的生命は、淨土宗義を實踐的に把えたところに、その生命が躍如としていることは、上記の諸師の傳記の一を見ることにより、最もよく理解せられる。この淨土宗義を實踐的に把握し、出家の隱遁即ち精神革命を契機として、往生極樂を主觀の最高價值として、念佛の行業を修するとき、我が身の在るべき様は、主觀的恣意によつて構成されるものでなく、超越的絕對者の行爲規定として、主觀の奥底に囁かれた聲である。かくて超越的

絶對者の能動的意志により、主觀に感受せられた規定の反照と自覺するとき、恣意を泯亡して普遍性をもち、主觀を含む全體の意志の決斷を要請し、ここに始めて行爲規定は絶對必然性をもつに至るものである。かくの如くにして、他を律する規約は自を律するものであり、自は他の内に包攝せられている。

稱念の「專稱庵同行衆法度事」、「念佛道場七箇條」、「十一條別時念佛道場之掟」は、序いでの如く通途律令式、宗義安心起行秘蹟、別時念佛道場式であるが、此等は僧俗を包含し、能所を包括していることは云うまでもない。此等は西方欣求者の行業の在り方と、同行相互間における在り方について規定しているが、寧ろ同行相互關係について規定した條項に、諸師の風格が偲ばれて興味が深い。「專稱庵同行衆法度事」の五カ條^③は全文之れに相當し、その他の規約中にも破和合衆の禁令と佛教倫理の基本的條項が含まれている。即ち別時念佛道場の掟は、見佛要期の根本の心構え、道場における心操行儀について定める中、第六條は「他人之眠暴不可驚事」であるが、自らには「道場之内不可眠事」と定めている。又念佛道場七箇條中の第六條は、「假令雖自有道理對他不可致口論」と定め、「專修同行者持へき條々」の第七の説示は、「同伴の中において心に應ぜざる事有といへども、偏執の心を以て是非の沙汰をいたすべからず、若自他の爲に用ひましき事あらば、和合心を以て密に談ずべし、但し教誡說破の事は是を除くべし」とあつて、之れ單に同行間においてのみでなく、他宗他門との問答諍論をも禁じ、殊に「若人來りて問事あらば無分別の由を答ふべし」と、無益の諍論をも受け流さしめている。第五條は「日本國大小の諸神を敬ひ奉るべき事」であるが、これ古くは源空に對する興福寺僧徒の批難^④に對する陳辯と見られるが、當時最も爛熟した神佛習合説の影響とも見られ、又無住一圓の警策^⑤をも無視することは出来ない。基本的佛教倫理の遵奉は、絶對者と人間、佛凡の間柄の緊張度の昇進により、任運自然に宗教生活の上に具現するものである。念佛道場七箇條に、第三「酒肉葷辛者佛制之故不許入門内沉用之邪之事」、第四「殺盜姪妄者梵網所説之四重禁也別而於當院別時道場者訖度堅固可相守事」、第七「歌舞

管絃高笑雜談禁之事」と定められていることは、これ等の確認の要請であると共に、捨世地の特質である寺院の本質的使命及び機能の復原を意味するものである。

彈誓は慶長一四年、「七十三箇條制戒」^⑥を定めたが、道俗男女の道心者を對象とし、その宗教社會における長幼の序、道俗の相互關係、及び本堂庫裡等における言動、内陣における行儀等を規定し、「右七十三ヶ條於此儀背者其儀ニ隨御法度ニ取成候相別道心者物にかまはず御念佛を心にかけなみだをながしほれ」と可成者也仍如件」と結んでいるが、掟を定めることは環境を整えて、専修の心行を増進せんめんとする深義の存することが知られる。七十三箇條の中、「禁酒きん足之事」、「世間寺之出家内ちん入不可事」、「かりそめにも出家衆けさ衣はなすべからず之事」、「酒のミ申者くり迄も一同不可入事」、「かわはかまかわたび着する者不可出事」、「侍ニ而候共大刀大わきさし指つる者不可出事」、「侍衆小者一人ニ而出可被成事」、「たちゆはりいたすべからず事」等の條項は、捨世地たるの性格を具體的に明示するものである。「ワガシヲキナリ」と彈誓が署名捺印した嚴訓であるが、「六十より上の者法度背共ゆるすべし」との一條を加えていることは、自ら持するに嚴にして、他に寛なる念佛者のゆかしき内面性が偲ばれる。

稱念、彈誓の諸師の規約の根本精神は、觀念法門中の念佛三昧法に歸するのであるが、これを他に勧めて修せしめたのは忍激である。忍激は『別時念佛三昧法諺註』を撰し、自ら八誓を立てた。その標題は「第一誓 恭_ニ敬西方_一頃刻不_レ忘」「第二誓 堅持_ニ不語_ニ隨_レ息念佛_一」「第三誓 尅_ニ定期限_一須臾不_レ睡」「第四誓 不_レ得_ニ利那念_ニ世五欲_一」「第五誓 萬德洪名慎不_ニ訛略_一」「第六誓 具_ニ足願行_一一心念佛_一」「第七誓 住_ニ見佛想_一念念相續_一」「第八誓 所見境界善韜惡懺」であつて、四言二十四句でその意を解明しているが、これ自らの自策自勵を目的とするものであるが、弟子激運は「從_下侍_ニ函丈_一日_ニ謹膳寫服膺備_ニ于修持左券_一者有_レ年矣」と述べる如く、他の規範とすることを拒否するものでないことがわかる。

無能は正徳三年十二月、祈請制誡七十二件を録し、みずから心の師と成り、自心を誠しめられた。その要は道心堅固に修行し、勤行怠ることなく、手常に念珠を放たず、深く本願を信じ往生を疑わず、虚假を雜えず一向念佛し、極樂に回向して餘報を求めず、三業共に西方の教えに背かず、佛法を愛護して身命を顧みず、念死念佛して畢命を期となす心行の警策と、念佛に廢惡を具すと雖も世間出世間社會において、特に三業を慎むべきこと詳細に逐一示している。

關通は六時勤行不斷念佛を定規としたが、その徒弟に課するところは、「その幼歳にして薙染し籍を教養に通ずるの輩は、六時の勤行内陣に出て、寺規に依準して禮讃誦經を兼修すべし。勤行の餘暇は寸陰を惜てもはら宗書を學し、傍に他家を探り、眞實に自家の安心を學德して、行業を策勵し、正見に佛門の教義を研覈して、宗乘を荷扶すべし。もしその晩年に落髮するものは、六時の勤行外陣に出て、單に念佛を修し、其外にまた晝夜輪次に入堂して、不斷念佛を修すべし」(淨全一八・二三六)と出家者を二類に分けている。この中後者の發心入道者には、心に無常を忘れず稱名し、心緩慢となり稱名懈ることあれば御傳、語燈錄、三部假名鈔、念佛名義集、一言芳談、撰集抄、長明發心集、閑亭後世物語、無能和尙行業記等を熟讀して心を勵まし、共住者相互に善友となり、境界を如法にし、繫着をはなすべきことを教示しているが、これ恐らく西方寺の規則一十三規百有餘條の骨子をなすものであらう。明和二年(一七六五)「衆尼をして正見に住せしめ、障なく念佛相續して、決定往生の素懷を遂げしめんために」定められた貞壽寺規五箇條は、前記の趣意によるもので、更に五戒八齋戒、十重禁戒を護持し、廢惡の用心緩慢なるべからずの一條を加えている。されど關通の「念佛講衆示書」^⑥一篇は他に影響を及ぼすこと大であつて、印行者法洲は『四要書』の序文に、「專修念佛同行講衆え掟書并に臨終用心、同追加の三篇は、故向譽尊師(關通)の著述にして、門下の士女に示されしを、我光譽先師(法岸)向師の座下にありし時、書寫して護持せられしを、當寺(西圓)住職の後、例月の念佛會等に

は、必ずこれを披講してねんごろに勸誡せられける」とあつて、その遺制は長門に及び、梓に上することによつて後世に廣く行われることとなつた。内容は平生の教誡を七條に要約したものであるが、「生死事大に無常迅速なり、各々頭然を拂ふが如く、しきりに念佛して、一向餘事にわたらず、佛の智見をおそれて、雜談高笑あるべからず」の前序によつて知られる如く、臨終用心の肝要、如法の恭敬、日課念佛を同行相互に誠しめつつ、如法の行儀、安心起行僻謬なき用心、祖典により安心決定し、子孫に念佛相續を遺囑し、日課弟子の命終には戒名月日を關通に知らし、念佛講衆の死去には中陰中に、百萬遍念佛を修すべき箇條を擧げ、「右の件條は、古賢の跡をしたひ、日課稱名の同行中へ、記し送るもの也、伏てねがはくは、おのゝ念佛講と號して、集會の砌この趣を相心得、信行相續の一助にそなへ、勇進念佛せらるべきもの也」と結ばれている。之れによつて製作の趣意、並びにその掟の普及は、とりもなおさず鎮西正統の普及を意圖するものであることが判る。

關通について宗要を鍛鍊した法岸は、四要書の出版に見られる如く、關通の清規の遵守普及者であつたことは云うまでもない。師は「尼庵の掟」として、男僧男子の出入制禁^⑩、多葉粉の制禁の二條と勤行掃除の寺内の勤務と稱名勇進^⑪を命じ、「右の條々堅く相守り、專修稱名勇進相續せしむべし、若違犯せしむる者においては、速に離弟擯出せしむべき者也」とあつて、條項僅かなれども、一も違すれば離弟擯出の處斷を受くべき重要事項をのみ出せるものである。三師中法洲は、僧俗の念佛結衆たる淨業會規則^⑫を作つた。會日は毎月二日、十四日、二十日とし、會日の時間割、結衆相互の信心策勵、結衆中の病者の臨終正念回顧、命終後追善念佛會を、定例外に一日増し、退信者の除名、別時念佛は三業清淨なるべきこと、午後の勸誡は庵主これを勤め、教化内容は一向專修の安心起行臨終用心を以てすることとし、これ等について「全我胸臆の新義にあらず」としているが、之れ關通の「念佛講衆示書」に負う所が多い。即ち結衆中の命終者の爲め中陰中に一日追善念佛を修することは、關通の「右念佛講衆の内、死去候はゞ、中陰

のうちに、おの／＼相集り、百萬遍修行これあるべく候、別して大切に勤修あるべく候、制にそむくべからず」に該當し、殊に結衆相互に親昵し、異縁を防ぎ道業を助成し、一佛淨土に心をかけよと云う一條は、關通の「日課念佛、同行のまじはり親服にいたし、互に警策を加はへ、心行怠慢なきやう、相續いたされ、一佛淨土の本懷をとげらるべき事」の繼承である。

要するに諸師の各禁制するところは、巨細精略の別はあるが、その精神は念佛者の環境を整備し、特に別時念佛の聖軌、不斷念佛の方規に准じて稱名せしめ、廢惡修善の旨を守つて、身持如法たるべき事の範圍を出すものではない。他を律することは、自を律する精神の反照であり、自を律することは率いて他の衛星を輝かしめる如く他を律することとなる。

(六)

徳川時代に淨土宗内に勃興した復興運動には、二種の傾向即ち宗祖の高風を恊悦して之を復興せんと企て、他方には佛祖の清律を敬慕して之を再興^⑧せんとする運動、換言すれば隱遁専修主義と、持律念佛主義興隆を念願とする二種の運動が擡頭した。

持律念佛主義のよつて來るところは、「吾聞住ニ在佛家ニ以レ戒爲レ本而我門律幢久仆未レ有ニ能扶起焉者ニ本而仆矣吾豈忍ニ坐視乎」と意を決したのは靈潭であり、又湛慧は「嘗以爲戒是沙門之本軌慧命之所レ依吾當嚴ニ淨毘尼ニ以遂^レ夙志」として、靈潭の門に投した。^⑨靈潭の主張は「生弘ニ毘尼ニ死歸ニ安養ニ勉哉勿怠」の持律念佛の教示であつた。自誓受具後の湛慧は「自是操持益嚴四事儉素臨衆接客無ニ委隨風ニ以レ故非ニ質直誠勤之者ニ不レ能ニ親炙ニ」とある如く、極めて排他的であつて、自ら持すること清嚴であり、俗衆に近接し難き感を抱かしめ、社會と通ずる窓は授戒にのみ

存した嫌いがある。

律僧に反して捨世派は抖擻行脚、四方に遊化し、一所不住を旨とした。諸師は好んで行脚したが、關通は「古德の行狀をうかゞふに、或は明師を千里の外に求め、或は道心を諸國の佛神に祈りたまふことあれば、予もおよばずながらその賢き跡を學ん」(淨全一八・二一九) ためとしているが、これ諸師に共通するものを持つてゐる。更にこの外古德の遺跡に往詣して遺蹟を思うて結縁し、幽境靈窟を訪ねて修道の場を求めた。従つてこれらの機縁純熟の地に自ら寺院の建立となり、念佛集團社會の成立↓僧俗清規の制定となつた。稱念は天文一三年「濟度弘通のために諸國に行脚せん」(淨全一七・六三〇) と天智庵を出で、彈誓は「時に漸く利生のおもひを起し」(同八・六八) 上て美濃武儀山中における籠居念佛に終止符を打つて化他門に出でた。享保一一年忍激自記の夢の記に「或時夢ニ萬無上人來テ利益衆生ハ天運ニ任セヨト勵ク急度誠示シ給フ」(淨全一八・二二八) とあつて、自身得脱の根幹が堅實となれば化他の枝葉繁からんことを自知し、化他發願文には「上達利智高貴福德ノ人ヲ諂強勸ルコトナク、専ラ貧窮孤獨田夫下賤重障愚癡弊惡鈍根ノ者ヲ化スルヲ先トセン」(同上・二二六) と、化導の志すところを明らかにしている。隱居獨住、專稱念佛の道徳を渴仰する緇素は跡を斷たず、澄禪は近江平子山に單身精進したが、この山も「一十六年、歸依之徒亦集、禪復避之」(淨全一八・四七五) けて大原山に登つた。「貴賤男女、拜趨請益」(淨全一八・四七五) の語は、德化を慕う群衆の狀を物語つてゐる。この遊方性は看過出来ない捨世派の特質であつて化導の中核をなすものである。

又彈誓の傳に「上人の法化既に國中に普くして念佛申さぬ人もなく名號かけぬ家も希なり」(淨全一七・六九〇) とか、關通の教化により中一色の弊習は、「菽麥不辨の童男童女の類までも悉く因果を信じて深く惡事を恐れ、蟬蟀を翫び蠅蠅を殺すなどのことはすべてなさざりし」(淨全一八・二三二) とか、「唯少長ともに惡事をなすを耻辱とし、一邑舉りて往

生を願ひ念佛を勵み勤る」(同上) 如き美俗を産み出すに至つた。法岸においても「説^ニ欣厭易行義趣、會^ニ視聽者心
駭神怡^一、大猷漸行、土風一變、樵夫農民漁者獵人、無^下一不念佛者^上」(淨全一八・)とあるが如く、社會淨化の實甚
だ大なるものがある。

持律念佛主義の意圖するところは、關通の言える如く、「明律の比丘僧を請じて住持せしめば、これに親近し、そ
の風を見聞せんもの、おのづから沙門の止作の事をしり、慚愧を生じて、正見實行の門に入るの因縁となるべきか、
もし然らば弊風こゝに一轉し、宗化更に輝をますべし」(淨全一八・)の一點にあり、隱遁專念主義は關通の弟子の言
に、「此寺今規則嚴にして、淨業榮祖道を輝すに足れり」(同上)とあることによつて、その趣意を伺うことが出來
る。祖道增輝は捨世派の行化、率いては寺院建立となる。庵居練行の道場がそのまま社會教化の通路ともなり、又關
通の如く寺院は「今時遁世出家の人、はじめのほどは勇ましく念佛すれども、稍年月を歴ぬれば、多くは道念銷亡し
て佛祖の教誡を護らず、世上の無常におどろかず、正業を懈廢して空しく光陰をおくり、ついに此度の往生をあやま
つにいたる。……所々に道場を營構し、遁世出家の人をあつめて共住せしめ」ん意圖の爲めに建立せられたものとあ
る。しかし此等の寺院と社會との關連は、既に化他度生の佛作佛行の精進者の止住するところであるから、眞に佛教
が大眾に解放浸透せられる水路となつた。遊方性が教化力の源泉をなすことは、獨り捨世派に限るところでないが、
念佛者を共住せしめた道場(寺院)を目的的に建立したことを總合して捨世派の一大特質とし、この寺院が他の、官
寺、律院と著しく異り、社會性の甚大なることを見逃すことが出來ない。

註① 辻善之助氏著『日本佛教史』、中世篇之五に天文一八年宣教師フランシスコ・ザビエルの書翰、永祿四年パードレ・ガスパル・
ビレラの印度のイルマンに賜つた書、應永二七年朝鮮回禮使宋希璟の紀行老松堂日本行錄、鹿苑日錄、弘治二年結城家御法
度、永祿七年パードレ・ガスパル・ビレラよりポルトガルのパードレ・イルマンに贈つた書翰を載せ、室町時代僧侶の墮落生

活の狀態を述べている。

- ② 忍濃和尚行業記に、「師自歎曰、曩者宗祖、年至十八、辭臺嶺皇圓闍梨席、隱閉黑谷、紹時俗交、大企弘法之志、我亦同齡、虛積歲月、内魂深矣、因忽感激、發誓曰、澆季衆生、出離要法、唯在念佛一門耳、然時世沼襲、浸以成俗或諷詠嘉號、如俳歌妓謠、或訛略六字、招闕支分過、宗祖大師曰、萬善妙體、卽名號六字、恒沙功德、具口稱一行、然則一聲訛稱、則損多善根、一字闕略、則失功德、吾儕豈可不大息流涕、正是弊風乎（淨全一八・三）
- ③ 專稱庵同行衆法度事、一於同一念佛衆者無親疎眞實堅固可思想事、一於世間出世之事立我義分不可致諍論之事、一掃除已下各可爲同心事、一對在家之人不可無禮事、一佛殿勤行晝者三番夜者總番四番可定之事、右所定如件、天文二十二年極月
- ④ 「興福寺奏狀」、第五背靈神失、念佛之輩永別神明、不論權化實類、不憚宗廟大社、若恐神明、必墮魔界、
- ⑤ 沙石集卷二、淨土門の人神明を輕んじ罰を蒙る事（岩波文庫本上・五〇）
- ⑥ 淨土宗學講座、江藤澁英氏「彈誓上人傳」
- ⑦ 淨全一八・一六二に全文を擧げている。
- ⑧ 淨全一八・二四六に全文あり。結文は「右の五箇條は、衆尼をして正見に住せしめ、障なく念佛相續して、決定往生の素懷を遂しめんがために、これを書いて授與するものなり。汝等師恩を報せんと欲せば、かたく上件の旨趣をまもり、一期退轉なく念佛相續して、同じく極樂に生ぜよ」といふ
- ⑨ 關通全集卷五・二四に全文を擧ぐ。その本旨を前序に「謹で有缘の同行、念佛の信者に告ぐ。生死事大に無常迅速なり、各々頭然を拂ふが如く、しきりに念佛して、一向餘事にわたらず、佛の知見をおそれ、雜談高笑あるべからず」と述べている。
- ⑩ この條項は特に綿密であつて、次の如き但書がある。「但し師用井に不淨所掃除の人等は制外の事。若無據要用ありて入來候はゞ尼衆一同にて聞肩、速に歸しまうすべく候遅々して無益の物語堅禁制の事。たとひ無據要用にても男僧男子は、夜中の出入堅禁制、また親子の間たりとも止宿無用、暮六ツ時を限りに出界せしむべし。又男僧男子にかぎらず、惣じて女子小兒等にて無用の人出入堅禁制の事」之れである。
- ⑪ 「常に老病死を急じて稱名勇進すべし。假にも戲笑雜話堅禁制の事」とあつて、念死念佛の勇進者は高笑雜談が自障障他の所以を以て、諸師等しく禁制するところである。
- ⑫ 淨全一八・五五〇に全文を載す。
- ⑬ 大島泰信氏「淨土宗史」（淨全二〇・六〇一）
- ⑭ 靈潭大和上行狀（淨全一八・四八〇）
- ⑮ 湛慧和上行狀（淨全一八・一八八）